



「活字」から「生きているドキュメント」へ

今年の正月は世紀の変わり目と重なったこともあり、メディアは歴史的な視点からさまざまなテーマについて特集した。とくに日本のジャーナリズムは、必ずと言っていいほどIT(デジタル情報技術)の登場を歴史的な転換点として取り上げていた。その中で「ITはグーテンベルクの活版印刷に匹敵する革命である」という論調の記事が目が止まった。

壮大な見出しにもかかわらず残念ながら記事の中身は、ITの登場でコンテンツマーケットは格段に広がるというお気楽な解説に過ぎなかった。しかし、この記事が言うように、歴史が活版技術によって大きく変えられ、それ以降の私たちの生き方や考え方が、それなくしては成り立たないほどの影響を受けていることは誰しも認めるところだろう。

と、いったんうすいたところで、ふと気がついた。これを「言わずもがな」と見過ごすべきではないのだ。

グーテンベルク以前、書物の頒布拡大は修道院などで行われていた「写本」という集団的手作業を通じてしか行われなかった。そのため、知識は特定のグループに占有されていた。だが活版印刷の登場によって書物の量産化が開始され、その結果、情報・知識は広く多くの人に解放されることになった。以来、私たちの社会はその恩恵を享受し、豊かなコミュニケーション文化を築いてきたのである。

しかし、この事実を逆の立場から考えるとどうだろう。私たちは活版印刷やその要素である活字という技術が代表する様式に縛られていると言えないだろうか。「メディアはメッセージである。あまりに活字が主導する文化に慣れ親しんでしまったため、意識することなくその枠組みの中にとどまってしまう、その彼方にある新しいコミュニケーションの可能性に目を向けていないのではないか。

そう考えると、もし現在手にしているITが本当の革命性を持つならば、いや、ITに真の意味での革命性を与えたいのなら、私たちを「グーテンベルクの呪縛」から解放する環境の実現をめざすべきだと思えてくる。

さて、ここでいつもの話である。それではITが可能にする脱グーテンベルクの展開とは、どういうものだろう? コミュニケーションという行為のどこに注目していけば良いのだろうか?

字数も限られているので結論的に言うと、書き文字、図といったコミュニケーションを通じて残した「結果」ではなく、対面的なコミュニケーションの場で発話している様子、ドロイングによって文字や図形を描いている様子など「プロセスの動的表現」に目を向けていくことだ。



「活字」とは言いながらも、実は紙の上に印刷された文字は生きてはいない。コミュニケーションの痕跡に過ぎないのだ。そして、私たちはこれまで、あらゆるメディア上でこの痕跡を効率良くとどめ、複製することだけを考えてきたのではないが。私たちは表現の結果として残されるドキュメントのあり方にはこだわってきたが、意思表現のプロセスをダイレクトに扱おうとは考えなかった。表現行為をライブのまま扱えるメディアを作ろうともしなかったし、持ってもいなかったのである。

たしかにPC以前でも、テープレコーダーなどの対面的発話の様子の一部をそのまま記録できるメディアはあった。だが、音声とともに文字や図形をドロイングする様子を同期的に残し、それを再生したり、編集したりすることで創造的コミュニケーションにつなげようとしたものはない。PC、特にビットマップディスプレイ上に描かれるパターンを高速に処理し、同時に音声や映像といった表現を扱うことのできる、いわゆるマルチメディアPCの登場により、ダイナミックな生きているドキュメントの可能性が見えてきたのである。

情報創造から情報協創へのアプローチを模索している私たちにとって、共有できる「場」の確立は必要不可欠である。「場」で触発された他人の発想・意思の発現であるマルチモーダルなアクションを並行的に体験したり、あるいはその記録を改めて再生し、他人の発想のきっかけを追体験して、新たな着想の可能性に気づいていくことは、ネットワークという新たな環境の特質を生かしながら、効率的な情報創造支援のデザインを考える第一歩となるに違いない。重要なのは、こうしたマルチモーダルな動的表現の記録および再生を通して、我々の意識を別の発想の想起に導くようメディア環境をデザインしていくことだ。人の意思表現を生きたまま蓄え、編集できるような様式とはどのようなものか……それを可能にするドキュメントの新しいかたちが求められている。

グーテンベルクの残した活字文化の桎梏から逃れ、生きているドキュメントを取り扱える新しい仕組みを作り出すことこそ、新しい世紀を生きる私たちのデザインテーマにふさわしいのではないかと思う。



[インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ] ご利用上の注意

このPDFファイルは、株式会社インプレスR&D(株式会社インプレスから分割)が1994年～2006年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面をPDF化し、「インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

<http://i.impressRD.jp/bn>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレス R&D)、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D(当時は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接のおよび間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先

株式会社インプレスR&D

All-in-One INTERNET magazine 編集部

im-info@impress.co.jp